



駒作りの ルーツ



駒師・初代「大竹竹風」

大竹さんの父、治五郎はるごろうさんは東京都神田（現千代田区）生まれ。治五郎さんの父で、大竹さんの祖父にあたる治郎松じろまつさんは三条市出身で、東京で黄楊つげを使った櫛くし作り職人だった。時代とともに櫛の需要が減少し始めた頃、将棋の駒となる木地きじを作らないかと話があり、将棋の駒も櫛も木地の材料と削る角度が同じということもあって櫛作りの傍ら、木地を駒師に納めることとなる。その頃から幼い治五郎さんが木地を駒師に配達していた。その納入先が、当時の二大駒師の一人である奥野おくのいっきやう三香の下で働いていた職人で、治五郎さんはそこに出入りするうちに、駒作りの魅力に引き込まれ、見よう見まねで駒作りを覚えた。この日常の積み重ねが、駒師・初代大竹竹風（治五郎さんの雅号）誕生のルーツとなる。

東京大空襲とともに三条の地に

大竹さんは、昭和19年1月に東京都本所横

にして納めてもらうことができた。

川町（現墨田区）で生まれる。当時は太平洋戦争の真っ只中、東京大空襲で本所も全て焼け野原となる甚大な被害を受けた。そんな中、なんとか空襲から逃げ延び、祖父の生まれ故郷で、親戚も多い三条に疎開した。また、当時の三条では木工や刃物作りが盛んだったこと、加えて職人のまちという土地柄も功を奏し、戦争とともに停止していた駒作りを再開することとなる。戦後しばらくすると、黄楊も三条で手に入るようになり、三条の木工所から黄楊を駒の形

「全ての作業を一人ですることは難しいですが、職人のまちだからこそ高い技術力による木工加工が可能でしたし、力を借してくれる人がいたおかげで再開することができました。親戚に温かくしてもらったこともあって、おやじはここに残ったんだと思います」と大竹さんは言う。「この仕事は家内工業ですから、私が学校から帰って来ると、おやじから紙を剥げだの、干しである木をひっくり返せだの、いろいろ手伝われしました。私は4人兄弟の長男で、昔は家業を



唯一残っている幼少期の写真
大竹さんと母のミヨさん

継ぐのが当たり前でしたから、私には特に厳しかったんです」。14歳を過ぎるころには、後を継ぐことを決心していた大竹さん。その頃から自然と駒を彫っていた。

三条実業高校を卒業した時に、治五郎さんに連れられて向かった先は、当時、東京とうたわれていた本郷（現文京区）の前沢碁盤店だった。弟子を採らない店だったが、「せがれを修行させるならここしかない」と心に決めていた治五郎さん。駒を卸して店主と親しかったこともあり、頼み込んで話を付けた。